

万葉集1996番歌の「水左閤而照」の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the Second Phrase of the 1996th Poem in Manyō-shū

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集1996番歌の原文の第二句に「水左閤而照」という表記がある。この表記の訓みと解釈については従来主に二つの説が行われてきた。一つは「水さへに照る」と訓んで「(天の川の)水面までも照っている」と解するもので、もう一つは原文の「水」の後に「底」を補って「水底左閤而照」と改定した上で「水底さへに照らす」と訓み「(天の川の)水底までも照らす」と解するものである。いずれの説にも問題があるが、もっとも大きな問題は「而」を「に」と訓む点である。万葉集には1235件の「而」の用例があるがほとんどすべて「て」と訓まれており「に」と訓む確例は存在しない。

本論文では「水左閤而照」を「水さへててる」と訓み、その意味を「(天の川の)水さえ照っている」と解する新しい提案を行う。「ててる」という語はほかに例がないけれども、この語の本来形を「てり(照り)+て+ある」と想定し、これが当時の口語で「てってる」と促音便で発音され、文字化に際して促音「っ」が省略されて「ててる」と表記されたものと考え、このように考えて初めて「水左閤而照」の「而」を万葉集の標準的な訓み方である「て」として訓むことができ、またこの句の意味も前後の文脈と自然につながるようになる。

1. はじめに

この論文で取り上げる万葉集1996番歌は、巻十の「秋の雑歌」に分類された「七夕」という題詞をもつ98首(1996番歌から2093番歌まで)の中の最初の歌である。本論文の目的は1996番歌の原文の第二句「水左閤而照」の訓みと解釈について再検討することであるが、その前にまず先行研究を確認しておこう。以下に、今までに出版された代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、原文、注釈(第二句に関する部分のみ)、歌の大意を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更した。

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

①新日本古典文学大系^[1]

【訓読】 天の川 水さへに照る 舟泊てて 舟なる人は 妹に見えきや

【原文】 天漢 水左閉而照 舟竟 舟人 妹等所見寸哉

【注釈】 第二・三・四句の原文「水左閉而照舟竟舟人」は、訓釈に諸説あって、定解が得られない。ここには、『私注』の訓みを比較的穏当なものとして掲げ、訳を施した。「而」の字を「に」と訓む例として、「然叙年而在（かくぞとしにある）」（二〇〇五）の「而」を挙げることができる。「而」は、呉音ニ。

【大意】 天の川の水面までも照っている。対岸に舟を泊めた舟中の人は妻と相見（まみ）えただろうか。

②新編日本古典文学全集^[2]

【訓読】 天の川 水さへに照る 舟泊てて 舟なる人は 妹に見えきや

【原文】 天漢 水左閉而照 舟竟 舟人 妹等所見寸哉

【注釈】 水さへに一さへに→一八六一（水底さへに）。舟の美しさにつられて周りの水までも照り輝くことをいう。

【大意】 天の川の 水も照るばかりに色鮮やかな 舟が着いて 乗っていた彦星は 織女星の目に見えただろうか。

③講談社文庫（中西進）^[3]

【訓読】 天の川 水底さへに 照らす舟 泊てし舟人 妹に見えきや

【原文】 天漢 水底左閉而 照舟 竟舟人 妹等所見寸哉

【注釈】 原文、諸本「底」の字なし。赤人集「水底までに照らす舟」、一八六一による。美船の形容。また、牽牛を月人とみたふしがある（二〇一〇・二〇四三）。

【大意】 天の川の水の底まで輝かす舟を漕ぎおえた人は、妻と逢ったろうか。

④萬葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【訓読】 天の河 水底さへに 照らす舟 泊てし舟人 妹と見えきや

【原文】 天漢 水底左閉而 照舟 竟舟人 妹等所見寸哉

【注釈】 水底さへに照らす舟—原文「水左閉而照舟」とあり、この歌、元、類（三・二〇）に訓なく、西、陽、矢、京は朱書してある。紀、西、その他にミツサヘニテルとし、「舟」の下の「竟」を第三句に入れ、紀、西、細、陽にフナヨソヒ、矢、京その他フナワタリとした。代匠記に「水サヘ照トハ丹塗ナドノ飴レル舟ナリ…但赤人集ニ天河水底マテニ照ス舟ツキニ舟人妹ト見エソトアレバ、今ノ本、水ノ下ニ底ノ字ヲ落セルカ。然ラバミナソコサヘニテラスフネハツルフナヒト、讀テ、落句ハ妹ト相見エキヤト意得ベキ歟」と云つた。略解に「古本水の下底の字有り。然れば二三四の句、みなそこさへにてるふねのはて、ふなびと、訓べし」とあり、古義にも「底ノ字、旧本にはなし、今は一本に従フ」とあるが、現存の古本には「底」の字は無い。しかし赤人集に「みなそこ」とあり、「さへに」の語に対しても単に「水」でなくして、「能登川の水底并尔照るまでに」（一八六一）のやうに「水底」であるべき事が認められよう。彦星の船は「さ丹塗の 小舟もがも 玉纏の ま櫂もがも」（八・一五二〇）とあるやうな華麗な舟だから、水面ばかりでなく、水底までも照らす舟と云つたのである。「而」をニと訓む事は、この先にも「然叙年而在」（二〇〇五）とあり、日本書紀には「阿那而惠夜」（神代紀上）、「比苔嗟破而」（神武紀）、「伊莽儂而毛」（同）などあり、字音辨證（上）に「韻鏡第八轉に収て、漢次音ジ、呉次音ニの音なり」とある。「而」は廣韻（七三）に「如之切」集韻（同）「人之切」とあつて呉音ニである。「舟」の字、元、類に「丹」に誤る。紀、

西その他による。

【大意】天の河の水底までも照らすばかりの美しい舟、その舟を対岸に泊めた舟人は、妹と相見えたことであろうか。

⑤日本古典文学大系⁵⁾

【訓読】天の河 水底さへに 照らす舟 泊てし舟人 妹に見えきや

【原文】天漢 水底左閤而 照舟 竟舟人 妹等所見寸哉

【注釈】水底さへに一水底までも。底本、水左閤而。卷十、一八六一に「能登川の水底さへに照るまでに」があり、この歌から取った赤人集に「あまのがはみなそさへに」とある。また「大海の水底照らし」（巻七、一三一九）などがあるにより、「水」の下に「底」を補って、ミナソコサヘニテラス舟と訓む。「水さへに照る」と訓むと下へのつづきが悪くなる。而をニと訓むこと→二〇〇五注。

【大意】天の河の水底までも照らす舟を、舟泊てした人（牽牛星）の姿は、妹（織女星）に見えたであろうか。

上に示した五つの先行研究の具体的な問題点を検討する前に、まず「水左閤而照」に関するそれぞれの訓みと解釈をまとめておこう。

- ①の訓みは「水さへに照る」、解釈は「(天の川の) 水面までも照っている」
- ②の訓みは「水さへに照る」、解釈は「(天の川の) 水も照るばかりに色鮮やかな (舟)」
- ③の訓みは「水底さへに照らす」、解釈は「(天の川の) 水の底まで輝かす (舟)」
- ④の訓みは「水底さへに照らす」、解釈は「(天の河の) 水底までも照らすばかりの美しい (舟)」
- ⑤の訓みは「水底さへに照らす」、解釈は「(天の河の) 水底までも照らす (舟)」

①と②は「水左閤而照」を定本原文のまま「水さへに照る」と訓み、一方、③、④、⑤は「水」の後に「底」を補い「水底左閤而照」と改定した上で「水底さへに照らす」と訓んでいる。また①は歌の意味をいわゆる「二句切れ」として解しているが、②、③、④、⑤は第二句を第三句の「舟」に対する連体修飾句と解している。

以下の第2節ではまず上に示した五つの訓みと解釈の問題点について検討し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新しい訓みと解釈を提案する。

2. 先行研究の問題点

前節に示した五つの先行研究のうち③、④、⑤の問題点の一つは、1996番歌の第二句「水左閤而照」の「水」の後に「底」を補って「水底左閤而照」と原文改定していることである。この句は写本に異同がなく誤字や脱字の可能性はかなり低く、本来「水底」と記載されていたものが筆写の際に「底」が脱落したとする考え方には疑問がある。

第二の問題点は、①から⑤のすべてが「左閤而」を「さへに」と訓んでいることである。万葉集では「而」は「て」と訓むのが常であり「に」と訓む確例は一つもない。実際、万葉集には「而」の用例が1235件あるがそのうち1231件はすべて「て」（濁音3件も含む）と訓んでいる（ただし助動詞「たる」を「而存」や「而有」と表記したものが6件あるが「てある」→「たる」の音変化を想定し「而」は「て」と見なす）。残り4件のうち1件は2033番歌「天漢 安川原 定而神競者磨待無」の第三句の「定而」であるが、この歌

は難訓歌として知られており第三句以降はまだ訓みが確定していない。しかし「定而」の「而」は「て」と訓む可能性が高い。ほかの1件は2549番歌の第四句「木枕通而」であるが、そのまま訓めば「こまくらとほりて」と八音の字余りとなるため、通説では最後の「而」を無視して「こまくらとほり」と訓んでいる。残る2件は1996番歌の第二句「水左閤而照」と2005番歌の第四句「然叙手而在」である。前者については本論文において「而」を「て」と訓む新しい説を提案する。また後者の「然叙手而在」については、従来から訓み方に諸説あるが、本論文の姉妹編において「而」を「て」と訓み、句全体として「しかぞてである」と訓む新しい説を提案する[6]。したがって、万葉集中の1235件の「而」の用例のうち1231件は「て」と訓み、残りの4件も「て」と訓む可能性があり、少なくとも万葉集においては「而」を「に」と訓む確例は一つも存在しないことになる。

にもかかわらず、従来、1996番歌の「水左閤而照」（および2005番歌の「然叙手而在」）の「而」が「に」と訓まれてきたのは主に次の三つの理由からである。第一に「而」の字音が呉音「ニ」（漢音は「ジ）」であること、第二に日本書紀に「而」を「に」と訓む例があること（実例については第2節の④の注釈を参照）、第三に万葉集のほかの歌に「さへに照る」という用例が存在することである。しかしこれらの三つの理由に対して以下のように反論することができる。

まず第一の理由については、確かに万葉集の仮名表記体系は主として呉音体系であるが、万葉仮名は必ずしも漢字の字音（呉音）に基づいているわけではない。例えば、万葉集に215例ある「津」はもっぱら「つ」（または「づ」）と訓まれており、字音（呉音）の「シ」（または「シン」）に訓まれた例は一つもない。ちなみに古事記歌謡や日本書紀歌謡には「津」の用例はない。

第二の理由については、確かに「而」を「に」と訓む例が日本書紀にあるが、注目すべきは古事記に用例がないことである。一般に、万葉集と古事記の仮名表記体系は似ており主として呉音体系であるが（漢音も一部にはある）、これに対して日本書紀は主として漢音体系であることが知られている（[7]、p. (25)）。すなわち、万葉集・古事記と日本書紀の仮名表記体系はそもそも異なるのである。例えば、「句」（呉音「ク」）の字は日本書紀歌謡に「く」の仮名文字として13例あるが、万葉集と古事記には一つも例がない（ただし古事記序文には漢語としての「句」の例が2件ある）。また「乃」の字音は呉音「ナイ」（漢音「ダイ」）であるが、万葉集の「乃」（2388件）はほとんどすべて「の」と訓まれており（「の」以外の訓みが3件あるが「な」の訓みはない）、また古事記歌謡の2例も万葉集と同じく「の」と訓まれているが、一方、日本書紀歌謡では「な」と訓まれている。以下に古事記歌謡の2例と日本書紀歌謡の1例を示す。

古事記歌謡82： 天廻む 軽の嬢子（加流乃袁登壳）（[8]、pp. 322-323）

古事記歌謡99： 纏向の 日代の宮は（比志呂乃美夜波）（[8]、pp. 350-351）

日本書紀歌謡95： 青丹によし 乃楽のはさまに（乃楽能娑婆摩儂）（[9]、pp. 274-275）

以上の例からも明らかなように、同じ文字が万葉集・古事記と日本書紀に使われていてながら、両者で異なる音に当てられている例は決してめずらしくないのである。もちろん、例えば「夜」のように万葉集・古事記と日本書紀で共通に「や」の音仮名として用いられている例もあるが、少なくとも今問題となっている「而」については、万葉集中に1235件ある「而」の中に「に」と訓む確例が一つもないこと、古事記にも例がないこと、この二つの事実を考えると、万葉集・古事記と日本書紀ではそもそも仮名表記が異なっていると考えるべきではなからうか。

次に第三の理由に関連して、第2節に示した①から⑤の説がすべて「左閤而照」を「さへに照る」と訓んでいるが、そのような訓み方の根拠の一つとされてきたのが次の歌の存在である。

10/1861 能登川の 水底さへに(水底并尔) 照るまでに 三笠の山は 咲きにけるかも
 赤人集の歌： 天河水底マテニ照ス舟... (④の注釈を参照)

これには次のような問題がある。まず1861番歌の例について見ると、これは能登川（佐保川の支流で奈良公園そばを流れる川）の水面に影として映っている（桜の）花があたかも水底から輝いているように見える様子を「水底さへに照るまでに」と詠んだものであり（あるいは川底に散った花びらが輝いている様子を詠んだもの）、今の1996番歌とは歌の背景が異なっている。なぜならば、1861番歌の場合は光源が水底にあるように見えるから「水底までも照る」という表現は適切であるが、一方の1996番歌では天の川の「川底」に光源があるわけではないから「水底までも照る」という表現は適切でない。実際、すぐ後で述べるように、赤人集の歌の内容からして光源はむしろ舟であり、舟が天の川の表面から川底まで照らすのであるから、1861番歌とは光線の向きが逆になっている。

次に、赤人集の歌について見ると、「天河水底マテニ照ス舟...」とあり、「照ス」と使役形になっていることから、「舟が（光源となって）天の川の水底まで照らす」のであり、③、④、⑤の「水底さへに照る舟」という訓みとは内容的に食い違っている。すなわち、「水底までに照らす舟」と「水底さへに照る舟」とは同じではない。なお②は「底」の字を補っていないが、解釈自体は③、④、⑤と基本的に同じである。一方、①は「而」を「に」と訓む点では問題があるが、歌をいわゆる「二句切れ」として解釈し、発句と第二句の意味を「天の川の水面までも照っている」と解しているのは適切な解釈だと思われる。

3. 「水左閤而照」の訓みと解釈

前節で指摘したように、従来の「水左閤而照」の訓み方にはいずれも問題があることがわかった。そこで本論文では「水左閤而照」を万葉集の標準的な表記法に従って素直に「水さへててる」と訓み、「水さへ照っている」の意味に解する。ここで問題となるのは「ててる」の解釈であるが、それについては次のように考える。すなわち、「ててる」の本来の語形は「てり（照り）+て+ある」であったが、これが当時の口語で「てってる」と促音便で発音されていたため、文字表記の際に促音「っ」が省略され「ててる」と表記された。

このような解釈の妥当性を示すために、まず「水左閤而照」が「水さへててる」と訓めること示そう。「水左閤」が「水さへ」と訓めることは言うまでもない。「而」は前節でも述べたように万葉集ではほとんどすべて「て」の音仮名として用いられている。また「照」は万葉集中に本歌も含めて78例あるが、すべて例外なく「てる」（あるいはその活用形）と訓まれている。したがって「水左閤而照」は万葉集の標準的な訓み方に従う限り「水さへててる」（あるいはその活用形）と訓むしかないのである。

そこで、もし第二句「水左閤而照」を「水さへててる」と訓んだとすると、この句は「さへ + 動詞の連体形」という文法構成をとることになるが、万葉集中ほかにもこのような例があるだろうか。以下に結果を示す。

12/2916 逢へる時さへ(相有時左倍) 面隠しする(面隠為)

16/3807 安積山 影さへ見ゆる(影副所見) 山の井の

第一例の「面隠しする」はサ変動詞であり、終止形語尾は「す」、連体形語尾は「する」であるから、確かに「さへ」に動詞の連体形が呼応していることが確認できる。また第二例の「見ゆる」は下二段動詞であり、終止形は「見ゆ」、連体形は「見ゆる」であるから、この例でも「さへ」に連体形が呼応していることがわ

かる。ただし、次の例のように「さへ」に続く動詞の後に完了の助動詞「つ」が付くときは終止形「ぬ」になるようである。

13/3268 天霧らひ 風さへ吹きぬ (風左倍吹奴) 大口の

以上のことから、「さへ」に続く動詞がそれに呼応して連体形になることは万葉集では決して異例なことではないことがわかる。

次に、もし1996番歌の第二句を「水さへてて」と訓んだとすると、文脈が第二句で切れるいわゆる「二句切れ」となる。万葉集中ほかにもこのような例があるだろうか。このことを確かめるために、今問題になっている1996番歌を除く巻十の七夕の歌（1997番歌から2093番歌までの97首）の中から第二句が「る」で終る歌をすべて列挙し、この中に「二句切れ」があるかどうかを調べてみた。その結果、次の2063番歌が「二句切れ」であることが確かめられた。

10/2063 天の川 霧立ち上る (霧立上) 織女たなばたの 雲の衣の 返る袖かも

最後に残された問題は「てて (而照)」の解釈である。本論文では、この節の最初にも述べたように、「てて」を促音便「ててる = 照ってる」の「っ」の省略形だと考えるが、このような考えに対して「照っている」を意味する万葉集の一般的表現は「てりたる」や「てれる」ではないかと反論する人がいるかも知れない。実際、万葉集には次のような例がある。

02/0230 ...天皇の 神の皇子の 出でましの 手火の光そ ここだ照りたる (幾許照而有)

19/4211 ...秋の葉の にほひに照れる (尔保比尔照有) あたらしき 身の盛りすら...

しかし、1996番歌の場合、「水さへ照りたる」とすると八音の字余りになるから適当でない。「水さへ照れる」は字数的にも内容的にも問題はないけれども、「照れる」は一般的な表現であり、今の場合「水さへ」と副助詞「さへ」による強調表現があることから「照れる」という一般的表現よりも本来の語形「照り+て+ある」を促音便で強調した「照ってる」という表現の方がふさわしいように思われる。実際、現代語でも「話し言葉」ではもっぱら「照ってる」という促音便が使われている。したがって、1996番歌の場合、「水さへ照れる」という表現も確かに可能ではあるが、「水さへてて (照ってる)」という促音便の表現もまた可能性があり、あとは実際の表記「水左閤而照」に照らしてどちらの表現が用いられたかを判断することになる。「而照」は「てれる = 照れる」と訓むことはできないから「てて = 照ってる」と訓むほかない。

ところで、もし「てて」の本来形が「照り+て+ある」であり、これが当時の口語で促音便として「ててる」と発音され、文字表記の際に促音便の「っ」が省略され「てて」と表記されたのだとすれば、このような例が万葉集中ほかにも例があるはずである。実は、万葉集3223番歌の第二句「日香天之」がその例だと思われるのである。

13/3223 かむとけの 日香空の (日香天之) 九月の しぐれの降れば ...

第二句の「日香」の訓みについては諸説がありいまだ確定していないけれども、本論文の姉妹編において

「日香」を「ひかく」と訓み、最初の二句「かむとけの ひかく空の」を「かむとけ（落雷）が引っ搔く空の」と解し、「ひかく」は「ひっかく（引っ搔く）」の促音「っ」が省略された表記だとする解釈を提案した（[10]）。本論文と併せて参照されたい。

以上のような解釈を間接的に裏付ける根拠がある。それは日本語と同系言語（姉妹言語）であることが言語学的に証明されている琉球方言において（[11]）、おそらく上古の昔から現在に至るまで促音便（ほかの音便も）がさかんに用いられてきたという事実である。「隋書」倭国伝に「（倭国に）文字なし、ただ木を刻み繩を結ぶのみ。仏法を敬す。百濟において仏經を求得し、始めて文字あり」という証言があることから（[12]）、日本で文字が広く使われるようになったのは仏教の經典が入ってくる6世紀半ば以降であり、それ以前の日本語は現在の琉球方言と同じ「話し言葉」のみの言語環境であった。この時代の日本語には当然促音便（ほかの音便も）もあったであろう。このことは琉球方言だけでなく隣接するアイヌ語や韓国・朝鮮語でも促音便などが多数用いられていることからほぼ疑いない。そうすると、日本で文字が使われ始めた6世紀半ばから初期万葉集の時代までのわずか100年間に促音便や他の音便形がいったんすべて消滅し、奈良時代を経て、平安時代以降に音便形が再び登場してきたと考えなくてはならない。これが事実だとはどうも考えられない。これらの音便は少なくとも口語の世界では6世紀半ば以前の文字のない時代から現代までずっと継続して用いられてきたと考えるのが自然ではなからうか。

ちなみに、上代における促音便に関連して「時代別国語大辞典 上代編」の「上代語概説」に次のような記述がある（[7]、p. (29)）。

（上代における）撥音・促音・拗音・長音は、音韻としては存在しないが、音声としてはあったかもしれない。すでに触れたように、地名「^{オシサカ}意柴沙加」（隅田八幡宮鏡銘）が「^{オサカ}於佐箇」（神武前紀）となると、中間にオッサカを置けば変化の説明が容易である。「於佐箇」の表記自体が、音声面に存する促音を無表記としたものという把握すら可能である。（途中略）促音や撥音は、実在したとしても文字化されることはまづなかった。音韻としては認められないのである。（以下略）

ここでは「オシサカ」（忍坂）が「オサカ」と表記されている例があることから、上代における「音声（口語）」としての促音便の可能性を認めている。なお、「音韻」という用語は「音声」とは別の言語学の理論的な概念であり、上代語の「音韻」は文献に現れた「書き言葉」に基づいて理論的に推定された音の種類であり、これに促音便がないのは当然である。

次に、なぜ作者が「てってる＝照ってる」という言葉を「而照」と文字表記したのか、その理由について考えてみよう。おそらく言葉全体の意味を「照」という漢字で表現した上で、促音「っ」を除いた残りの「ててる」という発音をできるだけ忠実に表すために「而」を前につけて「而照」としたのであろう。こうすれば、読者がまず最初に試みる訓みが「ててる」であることが担保されるし、しかも「照」という字から「照ってる」という意味がピンと来ることが期待できる。これに対して、もし本来の語形「てり（照り）+て+ある」に基づいて「照有」などと義訓表記したとすれば、「てりたる」や「てれる」などと訓まれる可能性があり「てってる」という本来の発音からずれてしまう。

なお、「水左閤而照」を「水さへててる」と訓み「水さえ照っている」の意に解することは、第2節の終わりに示した赤人集の「天河水底マテニ照ス舟…」という歌の内容と矛盾しない。というのは、赤人集の歌は「舟が天の川の水底までも照らす」という内容であるが、「水底までも照らす」という表現には「水の表面が照っている」ことも暗黙に含まれているからである。

ところで、これまで1996番歌の第二句の問題についてだけ議論してきたが、実はこの歌にはもう一つ重

大な問題がある。それは結句「妹等所見寸哉」の「等」の訓みである。第1節に示した五つの注釈書のうち澤瀉久孝氏の④「妹と見えきや」以外はすべて「等」を「に」と訓み「妹に見えきや」と訓読している。しかし万葉集では「等」を「に」と訓む例はほかになく、結句は④のように「妹と見えきや」と訓むべきであろう。ただし結句の意味については、「妹と相見えたことであろうか」と解するのではなく、「(彦星は)妹と(いっしょになるのが地上で観察する人々に)見えたであろうか」と解すべきだと思われる。従来の解釈はすべて結句の「見えき」を「彦星と織女が逢う」の意に解しているが、結句を「妹と見えきや」と訓む限り、「見えき」は地上の人々に「見えた」と解するのが文脈上もっとも自然である。実際、歌の最初の二句の内容「天の川が水さえ照っている」ように見えるのは地上で観察する人々にとってであるから、結句の「見えき」もまた地上の人々に「見えた」と解すべきではなかろうか。

このような解釈を裏付ける根拠がある。「見えき」の原文表記は「所見寸」であるが、万葉集中の「所見」という用法を調べてみた結果、この表現は「歌の作者(あるいは歌の受け手)にとって～を見る(～が見える)」という意味で用いられている。すなわち、「見る」の主体は歌の作者または歌を受け取る相手である。したがって、この1996番歌の場合、「見えき」の「見る」は通説のように「彦星が織姫に見える(逢う)」という意味ではなく、「(歌の作者も含めて)地上から七夕の夜空を観察する人々が、最終的に舟を漕ぎ終えて彦星が織姫といっしょになるのを見ることができたであろうか」という意味に解すべきだと思われる。

本論文の結論として1996番歌の訓みと大意をまとめると次のようになる。

【訓読】天の川 水さへててる 舟泊てて 舟なる人は 妹と見えきや

【大意】天の川は水さえ照っている。(二人が出会うにあふさわしい夜空の環境はこうして万事整っているが)(天の川を漕ぎ渡って対岸に)舟を泊めて舟中にある人(彦星)は織姫と(いっしょになるのが)(地上から七夕の夜空を観察する私たちにとって)見えたであろうか。

4. おわりに

この論文では1996番歌の第二句「水左閑而照」を「水さへててる」と訓み、「水さえ照っている」の意味に解する新しい提案を行った。「ててる」という語は文献にはほかに例をみないけれども、本来の語形として「てり(照り)+て+ある」を想定し、これが当時の口語で促音便として「てってる」と発音され、文字表記の際に促音「っ」が省略されて「ててる」と表記されたものと解釈した。

このように考えることにより、1996番歌の「ててる」を3223番歌の第二句「日香天之=ひかく空の」の「ひかく」と同様に万葉時代の「促音便の痕跡」として理解することができ、また「言葉の連続性」という観点から見ても、日本語における促音便は口語の世界では文字のない六世紀半ば以前から奈良時代、平安時代を経て今日まで連続して使用され続けて来たと考えられることができる。

参考文献

- [1] 「万葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 464-465、2000年。
- [2] 「万葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 74-75、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注(二)」、中西進、講談社文庫、pp. 339-340、1980年。
- [4] 「万葉集注釋 卷第十」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 209-212、1962年。
- [5] 「万葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 87-89、1960年。
- [6] 「竹生政資・西晃央、万葉集2005番歌の「然叙手而在」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第14集第1号、pp. 105-114、2009年。
- [7] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。

-
- [8] 「古事記」、新編日本古典文学全集、小学館、1997年。
- [9] 「日本書紀②」、新編日本古典文学全集、小学館、1996年。
- [10] 竹生政資・西晃央、万葉集3223番歌の「日香天之」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第14集第1号、pp. 125-130、2009年。
- [11] 「日本語の系統」、服部四郎、岩波書店、p. 38、1999年。
- [12] 「魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」、石原道博、岩波書店、p. 70、1951年。